

〔特集〕 子どもの学校生活から垣間見える家族

学校の相談室から見える子どもとその家族

— 共感から生まれる「空き地型空間」の重要性 —

茨城大学教育学部

生 越 達

はじめに

相談室で子どもたちとかがわっていると、ひとりひとりがそれぞれ異なった個性をもった存在であることに気づかされる。少しでも気に入らない他者は暴力で排除しようとする子どもがいる一方で、他者に何を言われてもじつところえて我慢する子どももいる。また同じ不登校の子どもでも、話をしてみれば、決して不登校生徒としてくくれないそれぞれの姿が見えてくる。したがって相談室では非行少年であるとか不登校生徒であるといったレッテルを出来るかぎり取り外してそれぞれの存在と出会えたらということを目指してきた。しかし、そうしようと思っても逆に、彼らの態度のうちひとりひとりの子どもたちを越えた共通した雰囲気を感じてしまっている自分に気づくことがある。以下の小論においては、こうした私の経験をたどりながら、子どもたちの一面をとらえ、さらにその背後に見え隠れする家族について考えてみたい。

1. 子どもたちにとっての他者の両義性

スクールカウンセリングの仕事は、カウンセラーの資質と当該の学校のおかれた状況によって非常に多様な可能性をもっているように思う。子どもたちの相談も様々であり、なかなかそこに共通性を見つけることは難しい。だが相談者として一つ実感することは、特に中学生の相談では、多様な問題に共通する彼らに特有の他者経験が存在するのではないかと

いうことである。その意味は、他者との関係の在り方が、子どもたちの問題行動の原因であるということではなく、様々な問題の背景に影を落としていて、問題行動にある色合いを与えているのではないかということである。

一言でその特徴を述べれば、子どもたちの他者とのかかわりが両義的だということである。たとえば、彼らはときに馴れ馴れしいほどに相談者に近づいてくることがあるかと思うと、その次の瞬間には今までの関係を忘れてしまったかのような態度をとることがある。そこから理解できることは、子どもたちは他者を強く求める一方で、同時に他者を恐れ、他者との出会いを避けようとしているということである。

A君は学校にはほぼ毎日来るが、授業にはほとんど出ずに校内をうろろうして過ごしている少年だった。彼にとって暴力事件は日常茶飯事であり、彼は校内でも怖れられていた。他校とのつながりもあり、相談者に暴走族との関係などを自慢することもあった。こうしたA君だが、相談室をひとりで訪れるとき、しばしば、相談者の隣に座ることがあった。前ではなく隣に座るのである。そして自分のことをいろいろ話しながら、相談者にべたべたと身体的接触を求めてきたりするるのである。だが、相談者とその少年のあいだに安定した関係が築かれているわけではない。次の相談があるから出ていってくれと話すと、少年は急に激怒し、ソファを持ち上げ相談者に投げつけたりもする。

この少年は他者を求めている。しかも彼の要求は、「甘え」といってもよいような身体的で依存的な要求を含んでいる。しかし少年はこのように依存できる

対象を強く求める一方で、他者が自分とは異なる存在であり、自分の思い通りにはならないことについては受け入れようとはしない。つまり他者の他者性とは出会わないようにするのである。A君にとって重要なのは、つねに他者が自己の存在を強化してくれることなのである。そして、こうした事実からわかることは、少年をわがままであるとか他者に鈍感であるととらえることは不正確だということであろう。少年の行動は、彼の自己の脆さ、傷つきやすさの結果に過ぎないように思われるからである。つまりA君は実は他者の在り方に過敏に反応しているのであり、他者の在り方によって、瞬時に、求めることと「排除」することが反転するのである。決してA君は自分の思うままに行動できているわけではない。また瞬時に反転するということは、自己であることの安定感が弱いために、彼の他者経験が未来や過去とつながりを持たない現在の経験に閉じこめられていることを意味する。

こうした他者経験は、一般に多くの子どもたちに見られるものである¹⁾。もちろん、他者と出会わないための方法はさまざまで、不登校生徒においてはむしろ自分を他者に合わせること(「迎合」)で他者と出会わないようにすることが多いだろう。それは「よい子」の問題として様々に議論されてきたことである。その他の方法として「同調」、「風景化」といった方法がとられることもある。自由気ままに見える子どもたちが、友達集団への「同調」にどんなに強く囚われているかということは相談室で多く経験することである。中学生にも見られる頻繁なメール交換なども同調的自己確認としてとらえられる側面があるだろう。またこのようにある範囲の他者に対しては非常に敏感な彼らも、同時に、それ以外の他者に対しては、電車のなかで床に座り込むといったように「風景化」することで出会いを避けているのである。

このように、子どもたちは一方で融合的他者を求め、一方で対立的他者を排除する。その理由は、すでに述べたように、彼らの自己が傷つきやすく、脆いからであろう。こうした傾向は不登校タイプの子ども

たちのみに見られるのではなく、非行タイプの子どもたちにも見られるのである。授業に出ないのではなく、教室に居場所がないため、教室にいられなかったり、また授業の邪魔をしたりする子どもたちがいる。また、校内に友達との結びつきを形成できずに、他校の生徒とゆるやかにつながりながら様々な問題行動を起こし続ける子どもたちがいる。異性に融合的關係を求める子どももいる。こうした傾向は、ごく普通に学校生活を送っているように見える子どもたちにも共通に見られる特徴である。もちろん、中学生という時期は、自己を確立していく時期であり、そのプロセスにおいて他者への依存や逆に他者を寄せつけないといったことが生じる。子どもたちの示す諸事象の背後には強い他者関係についての不安、ひいては自己であることへの不安が隠されているように思われるが、この時期の不安は自己形成にとってむしろ重要な意味をもち、この不安を乗り越えていくことが必要なことは確かであろう。だがあまりに不安が強すぎて、その不安から逃避するということが彼らには生じているように思われるのである。

II. 子どもたちの背後に見える家族

それでは、子どもたちの提示する「自己であることへの不安」から見えてくる家族の姿とはどのようなものなのであろうか。まず考えられることは、家庭が彼らにとって安全の基地として充分機能していないのではないかと、あるいはこれまで機能してこなかったのではないかとということである。特に思春期の中学生は、反抗をくり返しながらか、新しい自分をつくりだしていこうとする。そして反抗できるためには家庭が安心できる場であることを必要とする。この時期に家庭が反抗を受けとめられるような柔らかさをもてないとすれば、子どもの自己形成は行きづまり、他者と向き合うだけの自己を作りだしていくことができなくなることにもなるだろう。また安全の基地としての機能は中学生の時期だけに限られる問題ではない。幼児期からの子育てのなかで安全の基地として

の家庭が成立してこなかったとすれば、そもそも反抗するための自己さえも育っていないということもありえるだろう。そうだとすれば、子どもたちが、自己であることの不安を抱え、他者と向き合うことを怖れることも理解できる。相談室において子どもたちが融合的他者を求めることの背景には、自己であることの不安から何とかして免れたいという子どもたちの訴えが隠されているように思われる。子どもたちのなかに、家ではよい子なのに、学校に来ると甘ったれたり、悪さをする子どもたちが増えてきたと指摘する教師もいる。それは、家庭がうまく機能しなくなり、むしろ子どもたちが学校に家庭の果たすべき機能を求めてきていると考えることはできないだろうか。もちろん、彼らは最終的には家族に受けとめて欲しいのである。家庭が重要であるからこそ、家では「よい子」であるほかないといったことが生じているように思われる。

しかし、実際に子どもたちの母親や父親に会ってみて気づくことは、すべての例がそうであるわけではないが、子どものことを一生懸命考えようとしている家族が多いということである²⁾。ある単身赴任の父親は、子どもとの関わりのために週末必ず赴任地から数時間かけて帰ってくるようになる。そして月曜日の朝始発の電車で帰る生活を続けている。父親は面接にもしばしばやってくる。家族はみな優秀で、問題を起こしたB君の兄弟も何でもよくできた。B君自身もそれまでは部活動に熱心なとてもまじめな少年であったが、突然非行に走り、夜遊びや外泊などを繰り返すようになる。父親は、面接で、自分があまり子育てに参加せず、またどうしても子どもを甘やかすようなかわりになってしまっていたことがまずかったのではないかと悩んでいる。少なくとも、ここには自らの行動を見つめ直し、子どものために出来ることを何とか見つけようとする父親がいる。またある幼稚園の園長は、最近父親が行事などに積極的に参加するようになってきていると話す。子育てへの参加の機運が高まってきているというのだ。

また学校批判、教師批判を繰り返すような保護者の場合であっても、話を聴いているうちに、実はその批判が子育てに関する自信のなさに起因していることがわかってくることもある。むしろ自信がないこと、そのことを責められるのではないかという不安から自己弁護的になってしまうのである。子どもたちが孤立しているのと同じように、家族もまた孤立してしまっているのではないだろうか。

このような家族と出会っていると、次の三点のことを考えざるを得ない。

第一に、少なくとも、家族を非難することは、その家族を追い込めることになるだけなのではないかということである。たしかに、家族の歪みが子どもの問題行動を生み出すことはあるだろう。子どもは何とか家族を維持しようとする存在であり、そのためのスケープゴートになりやすいからである。また子どもは問題行動によって、家族の危機を知らせる存在でもあるだろう。したがって子どもたちの問題行動に対して家族にアプローチすることは有効である。だが一方、相談室においては、孤立し、苦悩している家族が見え隠れする。そうした家族の不安を受けとめることなしに、たんに問題点を指摘することは、不安が子どもに与える影響を考えても事態の解決にはならないだろう。不安をさらに高めてしまえば、安心の場を必要とする子どもたちの自己形成はますます阻害されるからである。だがそうした現実的な意味だけではなく、問題点を指摘する態度そのものが不遜なのではないかといった思いに囚われるときがある。家族の不安そのものが社会の歪みを背負った事態であるようにも思われるからである。

第二に、家族の理想論を言い立てることの危険性についてである。相談のなかでも、ときおり子育ての理想論に振り回されている家族に出会うことがある。彼らは、子育てをしっかりとやらなければと自分を追い込むことによってストレスをためこんでしまっている。とくに母親の場合、子育てについては当然の仕事、できて当たり前の仕事と周囲から見られるために、子育てが苦痛だという気持ちを誰にも相

談できないで抱え込んでしまう。また子どもの問題行動が自分の子育ての結果であると考え、自分を責めている。また父親に関して、すでにのべた単身赴任の父親のように、自らの父性欠如を思い悩む父親が存在する。そうした相談を受けていると、家族とはこうあるべき、母親や父親とはこうあるべきという眼差しが家族を追い込んでいる様子がわかってくる。もはや現実の状況を考えれば母性や父性を前提とすることは出来ないはずである。またこのことは逆からとらえれば、家族というのは義務感や忍耐だけでは維持できないのではないかということになる。義務感や忍耐から生まれるイライラや不安といった感情が、情緒的関係を求められる家族においては悪影響を与え、子どもたちに不安を与えてしまうといったことが生じるからである。

第三に、そもそも家族とはそんなに信頼していいものなのか、そしてこれまで本当に子どもを支えるシステムとして充分機能してきたといえるのだろうかという問いへとたどり着く。こうした実感は、アダルトチルドレンや虐待を巡る状況を見聞きする中でさらに大きな疑問となる。むしろ家族は子育ての責任を押しつけられ、しかも社会のなかで孤立し、閉塞的な状況に追い込まれているのではないか、そうした問いが生まれてくるのである。以前も、問題を抱えた家族はあった。だが家族はそのことでそれほど責められなかったし、また家族以外にも、子どもの成長にとって重要な他者となるようなシステムが社会のなかにあったのではないだろうか。現代の家族は、孤立化した状況のなかで責任を負わされ、さらに子育てに悪影響を与えるという悪循環に陥っているように思われるのである。

III. 家族支援における「共感」の重要性

家族を悪者にすることは問題の解決にはならない、というのがこれまでの考察の結論である。方法的に考えても、家族を責めることはさらに家族を追い込むだけであり、また事実としても、社会的な状況が

家族を孤立させていることを考えると、むしろ家族は被害者だからである。だが一方、家族が過度に責められるべきではないということは、これまで家族が果たしてきた役割を軽視していいということにはならない。子どもたちが融合的他者を求めることには、自分を受けとめてほしいという強い気持ちが示されている。家族の果たす機能については、たとえばコフートが「自己対象」と名づけた考え方が示唆を与えてくれるだろう³⁾。コフートは、幼児期に経験するような、自己から分離・独立したものとしては経験されない他者を「自己対象」と呼び、そうした他者との関係を治療関係のなかでも重視する。こうした他者は、人に自信を与え、また生きるための理想像を与えるのだが、たしかに今の子どもたちはこうした他者との出会いを求めているように思われる。

さて、家族の支援を考える場合、二つのアプローチが必要であるように思われる。一つは、家族そのものの抱えた問題を解消するためのアプローチである。もう一つは、家族機能のもつ限界をふまえ、家族の機能を補完するアプローチである。

それでは第一のアプローチとしては具体的にはどのような方法がとられるべきなのだろうか。スクールカウンセラーとして考えた場合、二つの方法が考えられるだろう。

一つの方法は、面接をとおして、相談者と家族の人が協力し、ひずんだ家族関係を作り直していくことである。相談の果たすべき大きな役割の一つは、こうした点にあることは確かであろう。スクールカウンセラーとしての専門性が試される場面でもある。

だが同時に、第二の方法が重要であると思われる。それは、関係のなかで「共感」することそれ自身を大切にすることである。家族のもつ自然な力を信じ、家族が余計なストレスを抱え込まないように、側面から支えていくという方法である。つまり、母親や父親が孤立して、子育てのストレスを抱え込まないように、子育ての不安や迷い、さらには怒りといったものまでも自由に話せる場を用意するということである。そこでは、自分の子育てがうまくいかないことに

罪の意識を感じたり、劣等感を感じたりする必要はなく、誰もがそうした感情をもちうるものが共有されることが大切であろう。相談室は、家族が孤立しないための居場所であることを求められるのである。したがって相談室では、自分を自然に語れるような雰囲気が重視されなければならない。

一般に、面接の空間はカウンセラーとクライアントがいるといった堅固な構造をもっている。したがって自由に面接に来てくださいと保護者の方々に話しても、彼らにとって相談室は敷居の高い場所なのである。相談に来た保護者から、相談室は気軽にこれるような場所ではないということと言われることもある。もちろん相談室には日常性を離れた自由さが存在するが、それは比喩的に言えば公園のような自由さである。相談室はきちんと設計され、構造化された空間だからである。面接の場は「公園型空間」なのである。

しかし、「共感」ということを重視するならば、他の空間の可能性についても考えてみなければならないだろう。それは、自然な会話のなかで自ずから子育ての難しさやそのストレスなどを語るができるような空間であり、構造化されずにただ無造作に用意された空き地のような空間である。こうした空間を「空き地型空間」と呼ぶことにしよう。むしろ家族を支えるためには、管理された「公園型空間」よりも、自助グループの発想に近い「空き地型空間」を作りだしていくことが重要であるようにも思われる。こうした「空き地型空間」は、問題が生じてしまった後の問題解決のための場としてのみではなく、それぞれの保護者が成長していくためのコミュニティとして規定できるのである。実際に私がスクールカウンセラーをしていたある中学校では、不登校生徒の保護者のための談話会のようなものを学期に何度かもうけていた。そこでは保護者のあいだに自然な会話が生まれ、相互に聴きあうことが出来るような場が生まれる。もちろん、こうした「空き地型空間」は放っておいて成立するものではないだろう。どのようにしてこうした場所を用意していくのかは、私自身の

今後の課題でもあるし、また学校が地域の子育てセンターとして機能するための重要な課題であるように思われる。

第二のアプローチは家族の機能を補完するアプローチである。つまり、家族の役割である重要な他者としての機能を、相談者がいくらかでも肩代わりするということである。中学生は、様々な仕方で彼らの存在を受けとめるように働きかけてくる。それは、必ずしもきちんとした相談のかたちをとるとは限らない。むしろふと訪れて話す話の中から、あるいはときには相談者に向けられる攻撃性のなかにそうした要求が込められていることがある。ある女子生徒は、相談室に私の悪口を言いに来る。私の顔を見たくないと言い、私と彼女のあいだに衝立をおいて顔が見えないようにする。だが彼女は一方では、ときおりそこから顔を覗かせて私の存在を確認しようとする。子どもたちは、ときに天の邪鬼な仕方で自らの存在を受けとめることを求めてくるのである。

先ほど家族に対する共感の重要性について述べたが、同じことは子どもたちとの関係においても言えるように思う。つまりスクールカウンセラーとしての子どもの相談はやはり必ずしも構造化された「公園型空間」のなかで行われるわけではないのである。むしろ曖昧な空間における曖昧な関係のなかで彼らの存在を受けとめることをしばしば求められる。その意味で、やはり「空き地型空間」を作りだしていくための準備をしておくことが大切なのではないだろうか。

こうしたアプローチは、相談者が、子どもたちにとっての「重要な他者」に一時的にでもなることを目指すということを意味する。相談者がこうした役割を果たせると考えることは傲慢なことかもしれない。また学校という構造化された空間のなかで、子どもたちとのあいだに「空き地型空間」を作りだしていくことは、難しい課題でもあるだろう。学校としては、「空き地型空間」での相談者と子どもたちとの関係は相談関係とは見なせないだろうし、たとえば授業時間でのそうした関係を認めることは、さぼりを認め

ることになるからである。だが、一方では子どもたちにとって「重要な他者」が必要であること、したがって家族以外にも「重要な他者」を確保すること、つまり重要な他者を社会化していくことが求められているように思う。実際に、先に述べたA君は教師集団が彼の存在を受けとめ続けた結果、卒業間際には親しい友人もでき、教師に攻撃性が向けられることもなくなっていた。

おわりに

これまで述べてきたことは、私のスクールカウンセラーとしてのわずかな経験から見えてきたことであり、とくにスクールカウンセラーとしてどのように子どもたちやその家族を支援していったらいいのかについてはまだまだ手探りの状態である。だが一方では、子どもたちや家族が自由になっているように見えて、実は孤立し、匿名化しやすい状況を生きていることは確かなことであるように思われる。そのなかで、みな一生懸命自分たちの居場所を探しながら生きているのではないだろうか。

私には、家族というシステムがこれからの時代においてどのような機能を果たしうるのかについてはわからない。そうしたことを明らかにしていくことは今後の大きな課題である。しかし、少なくとも現代の子どもたちにとって「重要な他者」と言われるよう

な他者の存在が必要であることは疑いないように思われる。今後そうした役割を家族が背負い続けていくものであるかは別にしても、現在のところでは家族のもつこうした役割を支えていくと同時に、重要な他者の機能を社会が分担していく他ないようにも思われる。こうした方向性は、同時に、社会における「空き地型空間」の意味をもう一度とらえ直すことを意味することになるだろうし、またスクールカウンセラーをはじめとする人間にかかわる職業の専門性をとらえ直すことにもなるだろう。

注

1) もちろんこうした子どもたちの特徴が問題行動を起こしている子どもたちにのみ見られるとするならば、それは問題行動を抱えた子どもたちに生じている二次的な反応としてとらえられることになり、一般化できないことになるかもしれない。だが一般の子どもたちにも見られるとするならば、それは子どもたちに共通して見られる特徴であるとしてとらえてかまわないことになるだろう。

2) もちろん相談に来るような家族は子育てに熱心なのだということもあるだろう。だが少なくともこのような家族でさえも問題は生じるのである。

3) コフォート『自己の修復』みすず書房 1995 や『自己の治癒』みすず書房 1995 など。